

研究タイトル：

仮定法現在と代用表現



氏名：	浅原 京子 / ASAHARA Kyoko	E-mail：	asahara@ube-k.ac.jp
職名：	准教授	学位：	修士(文学)
所属学会・協会：	英語語法文法学会, 英語コーパス学会, 日本英語学会, 日本英文学会		
キーワード：	英語語法文法, 英語史, 英語教育, 英語コーパス, 海外英語研修		
技術相談 提供可能技術：	<ul style="list-style-type: none"> ・英語教育、英語学習、英会話、英語の歴史・文化 ・技術英語、ビジネス英語 ・海外英語研修 		

研究内容： 仮定法現在と代用表現

要求・提案等の表現に続く that 節内で用いられる仮定法現在とその代替表現について、イギリス英語とアメリカ英語それぞれにおける使用状況の歴史的变化を分析する。アメリカ英語の影響でイギリス英語でも定着してきた仮定法現在だが、否定の場合は、現代イギリス英語ではアメリカ英語とは一線線を描いており、仮定法がいまだに敬遠されがちな用法であること、及びその代用表現の分布特性を明らかにする。

● 要求・提案等の表現に続く that 節内の動詞の語形例

The employees have demanded

that the manager resign (not resign). [仮定法]

resigns (doesn't resign). [直説法]

should resign (should not resign). [should+動詞原形]

これまでの研究で、増加定着しつつある命令仮定法とは対照的に否定命令仮定法が 1990 年代に至っても浸透していない理由として、*should not* だけではなく、従来思われていた以上に否定命令直説法が否定命令仮定法の不在を補って機能していることを示した。また、書き言葉と話し言葉や that 節内の主語、主節の時制などの制約も、語形の選択に影響を与えていることを指摘した：

(1) 話し言葉では、*should not* に比べて否定命令直説法が好まれる。(2) 一/二人称の主語の後では否定命令仮定法だけでなく *should not* も避けられ、否定命令直説法が選択される可能性が最も高い。(3) 主節の時制が現在形の場合にも過去/過去完了形の場合にも *should not* は同程度みられるが、否定命令仮定法と否定命令直説法は、現在形の用例に集中しており、主節の時制が過去または過去完了形の場合は *should not* が標準的用法である。

提供可能な設備・機器：

名称・型番(メーカー)	